

## [外国語]

# 既習の英語表現を進んで活用し、伝えたいことを表現しようとする児童の育成

ーコミュニケーションの目的の設定と単元入れ替えを通してー

長谷川亜耶\*

## 1 主題設定の意図

2017年3月に告示された小学校学習指導要領において、小学校中学年に外国語活動が、高学年に外国語科が導入された。外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す。」とある。ここで示された言語活動については、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うもの（文部科学省、2017）と示されている。互いの考えや気持ちを伝え合う活動について、直山（2018）は、「これまでの小学校高学年外国語活動でも、言語活動を通して外国語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成を目指す授業が行われてきているが、教師がなお一層意識し、子供とコミュニケーションの目的や場面、状況を共有し、実際に英語を使って自分の考えや気持ちを伝え合わせることが大切である。」と述べている。

筆者自身、新学習指導要領の目標に近付くよう、言語活動の内容を工夫し、どのように単元構成をするか考えてきた。「オリジナルレストランでお客さんとやり取りしたり、代金を英語で表現したりしよう。」や「外国の観光地でできることを英語で紹介しよう。」など、目的や場面・状況が明確な単元の終末を決め、バックワードデザインで単元や1単位時間を構想するなどの授業づくりに努めた。その結果、児童の姿から、学習した英単語や英語表現を聞き取ったり文字を識別して読んだりする技能が高まり、対同級生、対教師、対保護者と自信をもってやり取りする様子が見られるようになった。しかし、4技能5領域の技能を高める言語活動を意識した授業を重ねても、単元の終末で自分の考えを表現させると、その単元内で強化された表現の活用に残っていることに気付いた。児童がこれまで学習してきた英語表現は多数ある。だが、児童が自分の考えや気持ちなどの伝えたいことを表現する時に、学んできた英単語や英語表現を、どのように、どこで使用するべきかが分からないため学習の積み重ねが発揮されておらず、児童が学んだことが自分の思いを伝える手段になり切れていないのではないかと考えた。小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省、2017）では、目標に沿った活動の選択と効果的な配列について「目の前の児童の実態に合わせて、活動の反応や意識の流れなどを具体的にイメージしながら、活動を選び、配列していくことが肝要である。」とまとめており、単元配列を工夫することの必要性を示唆している。

また、児童とコミュニケーションの目的や場面、状況を共有するためには学習を行う明確な目標が必要である。単元の終末に児童同士で発表活動を行う実践は多く取り組まれているが、普段一緒に生活している児童同士では、自分が学習してきた英語表現で自分の思いは他国の人に伝わるかの実体験はしづらい。中岡（2020）は「外国語を使う活動と、コミュニケーションをとる必然性がある活動を連携させること、他教科や他領域との関連を行い、伝えたい内容を明確にすることで、子供たちが積極的に外国語を活用したいと考えることに効果的に作用する」と報告しており、外国語を学んだり自分の思いを伝えたいと意欲をもたせたりするためには、明確な目標が重要となることが分かる。

これらのことから、既習と新出の英語表現や英単語をできるだけ多く活用し、自分の考えや思いを英語で伝えやすいように単元の入替えを検討し、実際に自分の考えや思いを他国出身の方に伝えるという本物のコミュニケーション場面を設定することを通して、児童の学びの積み重ねが発揮できる授業づくりを目指すこととした。

## 2 研究の目的

本研究では、単元の入替えとコミュニケーションの目的の設定を工夫することにより、児童が既習の英語表現を進んで活用し、伝えたいことを表現しようとすることを検証する。

---

\*長岡市立富曽亀小学校

### 3 指導計画

(1) 実施時期：2020年6～7月

(2) 参加者：6年4組 30名

(3) 指導体制：メインティーチャーの学級担任とJapanese Teacher of Language (JTL)

(4) 単元計画

① 実施単元：「ふるさとの魅力を他国出身の方に英語で伝えよう」

～Unit 2 「Welcome to Japan.」 Unit 6 「This is my town.」～

② ねらい

- ・これまでに学習したことを活用して、長岡の魅力について自分が伝えたいことを書いたり、話したり、仲間の話を聞いたりする。(思考・判断・表現)
- ・自分たちの町について、学習した表現を聞き取ったり、書いたり、話したりする技能を身に付けている。(技能)
- ・自分たちの町について、調べ学習を行い、その魅力を他国の方に伝えようと取り組んでいる。(主体的に学習に取り組む態度)

③ 学習表現

季節…spring/summer/fall/winter

行事…Doll Festival/hanami/Children's Day/Star Festival/a fireworks festival/bon-odori/tsukimi/Shichi-go-san/momijigari/a snow festival/oshogatsu/setsubun

施設など…a beach/the sea/a lake/mountains/a river/a stadium/an amusement park/a Chinatown/a harbor/an aquarium/a zoo/a park/a museum/a library/a temple/a hospitalなど

センテンス…In (summer), we have (Nagaoka festival). What event do you have?

You can [see/eat/enjoy/buy/play/visit/go to/ride]～.

It's [big/small/long/short/new/old/cool/fun/beautiful/wonderful/nice].

[既習内容] 国名、動作、スポーツ、感想、職業、性格、身の回りの物、教科、曜日、好きなもの

④ 児童の実態

児童は、新しい知識・技能を身に付けることに意欲的である。自分の感情や考えを素直に言語や身体表現で表し、学級の雰囲気を作っている。男女いずれも、小学6年生という最高学年として、新しいことや難しいことに挑戦したいという気持ちをもっている。また、これまでに、3・4年生で「Let's try 1・2」を使用し、4年生から新学習指導要領移行期間に入っている。5年生では「We can! 1」そして6年生では「Here we go! 2」を使用するなど、外国語科導入における教材の変化に沿って学習の積み重ねをしてきた。

5年生時には、「オリジナルレストランでお客さんとやり取りしたり、代金を英語で表現したりしよう。」と、学びやコミュニケーションの目的を示した実践を行った。学習参観日に保護者にお客さん役になってもらい、英語でのやり取りを楽しむことができた。しかし、保護者も日本語を母語としているため、児童の意図を推し量ってのコミュニケーションといわざるを得ない。「英語を介して意思疎通を図ることができた」という経験は、相手が他国の出身の人であればあるほど実感ができるのではないかと考えるきっかけとなった。

また、自分が伝えたいことを表現する活動では、アルファベットや音声で慣れ親しんだ例文をなぞり書きすることから始めた。その後、自分が伝えたい内容によって動詞を選んで丸で囲み、目的語に当たる部分を日本語で書くなどしながら日本語と英語表現との変換を重ねてきた。次第に英語で伝えたいことを書き表す事に慣れてきた児童は、学習した表現を活用し、主語と動詞までをなぞり書きし、その後は単語カードを見ながら英語で書き表す活動ができるようになっていった。そして、英語で表現する機会が増えるにつれ「～と書きたいのだけれど、英語でどのように書くのですか。」と担任やJTLに聞くようになり、貸し出した和英辞典を使ったりして、自分の考えや思いなどの伝えたいことを既習の英語表現を活用してどう表現したらよいかについて関心を高めていった。

(5) 単元の構想と展開

① コミュニケーションの目的となるテーマの設定

単元を貫くテーマを「ふるさと長岡の魅力に目を向け、外国人に発信する」と設定し、コミュニケーションの目的や場面、状況を明確にさせる。児童に大単元で一貫したテーマを示すことで、何のために英語表現を聞き、発音練習をし、

読み、書き、話すのか目的意識をもたせる。

他国の人々に自分の身近なことを紹介するには、児童自身が自分たちの文化や習慣、ふるさとの魅力などを知っている必要がある。さらに児童が、他国の文化を理解することが必要である。普段過ごしている生活環境だけが全てでなく、「自分が知らないこと」「全く違う文化」があるという気付きや相手意識を表現に活かしていく。そして、ふるさとの魅力に気付いた児童は、他国出身の方に自分が伝えたい内容を進んで考え、既習の英語表現や調べた英語表現をどのように使えば伝えることができるか思考し、伝えたいことを意欲的に表現していくと想定した。

## ② 既習の表現を活用しやすくするための単元の入替えと接続

自分が伝えたいことを表現するためには、既習表現をスパイラルで繰り返し使用し、活用することが重要である。児童の中に表現が蓄積し、使用する場が理解でき、ようやく思いどおりに表現できるようになる。そこで「Here we go! 2」のUnit 2「Welcome to Japan.」とUnit 6「This is my town.」をつなげて構成し、We have…やWe don't have…、We can…、In季節, we have～.といった「長岡の魅力を発信する」ために必要な表現を習得する。

## ③ 児童一人一人の思いや考えを表現するための支援

児童一人一人が魅力を感じるふるさとの物や場所も違えば、伝えたい内容も変わってくる。そこで、英文に書き表す際に、基本的な主語と動詞のなぞり書き部分がある四線の段と、四線だけの段とでワークシートを用意する（図7）。また、既習表現を黒板に提示し、英文の内容や使い方を想起して伝えたいことをより詳しく表現できるよう指導する。さらに、「書く」活動時間を確保し、担任とJTLの2人体制で児童の質問や単語の指導に当たる。

表1 本単元の指導計画

|       | 時 | 学習のめあて                        | ・活動内容 ★主な英語表現                                                                              |
|-------|---|-------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| ユニット2 | 1 | 季節や行事の言い方を知ろう。                | ・発話練習 ★季節・行事                                                                               |
|       | 2 | 季節ごとの行事を伝えよう。                 | ・リスニング・季節と行事マッチングゲーム<br>★In 季節, we have～.                                                  |
|       | 3 | 季節ごとの行事を聞いたり伝えたりしよう。          | ・季節と行事を四線に書く・ビンゴ ★What event do you have?                                                  |
|       | 4 | 日本の行事でできることを伝えよう。             | ・スモールトーク・動作を表す言葉 ★You can see/eat/enjoy～.                                                  |
|       | 5 | 各地の行事でできることを伝えよう。             | ・慣れ親しんだ表現を読む・日本人ガイドになろう                                                                    |
|       | 6 | 長岡市の季節の行事でできることを調べよう。         | ・「ながおか学」で調べ学習 ★In 季節, we have～.<br>You can see/eat/go to/visit/buy/enjoy/ride～.            |
|       | 7 | グループで長岡の魅力ある行事紹介を作ろう。         | ・4人でグループを作り、1つの季節を担当してシートに書く。                                                              |
|       | 8 | 長岡の四季の行事とできることを発表しよう。         | ★What event do you have in 季節?<br>In 季節, we have～. You can see/eat/go to/visit/buy/enjoy～. |
| ユニット6 | 1 | アニメーションを通じて、学習内容を知ろう。         | ・発話練習・ビンゴ ★施設・場所                                                                           |
|       | 2 | 町にある施設や建物の言い方を知ろう。            | ・スモールトーク・発話練習 ★We have….                                                                   |
|       | 3 | 町にあるものとないものについて伝え合おう。         | ・カード交換ゲーム ★We have… We don't have….                                                        |
|       | 4 | 各地でできることを伝える言い方を知ろう。          | ・スモールトーク ★We can… It's….                                                                   |
|       | 5 | 他国の小学生が住む町について知り、長岡市のことを考えよう。 | ・他国の様子を映像で見たり読んだりする。<br>★We can… It's….                                                    |
|       | 6 | 留学生に向けて、長岡の魅力ある場所の紹介文を書こう。    | ・既習表現を想起する。・伝えたいことを英文にする。                                                                  |
|       | 7 | 長岡の魅力ある場所をクラスで発表しよう。          | ・学級の友達に自分の考えを発表する。                                                                         |
|       | 図 | 長岡の魅力紹介ポスターを作ろう。              | ・インターネットで画像を調べ、ワード文書に貼り付ける。                                                                |
|       | 図 | 長岡の魅力紹介ポスターを作ろう。              | ・印刷したポスターをデザインし、紹介文を転記する。                                                                  |
|       | 総 | 留学生の出身国について学ぼう。               | ・留学生に出身国の文化や様子の紹介をしてもらう。                                                                   |
| 終末    | 8 | 長岡市の魅力を他国出身の方に英語で伝えよう。        | ・長岡の魅力紹介ポスターをもとに、長岡市の魅力を紹介する。                                                              |

## 4 研究の実際

### (1) 児童とコミュニケーションの目的の共有

児童にUnit 2とUnit 6を通し、基本的な英単語や英語表現に慣れ、自信をもって発話することができるようになってきたら、「留学生に長岡市の魅力ある場所について英語で紹介しよう。」と提示した。児童は「外国の人に英語で話すのですか？」と驚いた表情とともに表現への意欲が見られた。コミュニケーションの目的を共有することで、「どこのことを話そうかな?」「どんな表現を使うと通じるかな?」という言葉が行き交い、思考し、表現しようとする様子が



見られた。

単元終末の言語活動について児童との共有を図った後、長岡市の魅力について「ながおか学」の冊子やインターネットで情報を集めた。おすすめの場所を紹介するという目的が明確になったため、自分自身のこれまでの経験から市内の行ったことのある場所に決め、その場所で何をするができるかを考えた。児童は、「春に美しい桜を見ることができるから福島江を紹介しよう。」「悠久山には球場があり、そこで野球の試合をしたことがある。」「寺泊水族館できれいなクラゲを見ることができる。」などの紹介したい内容を考えた。「どこを紹介すればよいか分からない。」「場所を決めたが、内容を決められない。」という児童はおらず、一人一人が高い意欲をもって紹介ポスター制作に取り組むことができた(図1)。



図1 「ながおか学」の活用

## (2) 単元入れ替えとスモールステップ

単元を入れ替え、Unit 2の次にUnit 6を接続することにより、既習の英語表現を多く活用できる機会を設定する。Unit 2の学習では、「長岡市の季節ごとの魅力ある行事と、そこでできることを紹介しよう。」という言語活動を軸に、スモールステップで「聞く」「話す」「書く」「読む」の技能を高める授業を構成した。

まず、季節や行事の言い方の発話練習を繰り返し、リスニング教材を提示してもキーワードを聞き取ることができるよう力を付けた。また、マッチングゲーム(図2)や日本人ガイドになろうゲーム(図3)などの活動に取り組み、教師と児童、児童と児童間の英語でのやり取りが徐々に成立するようにした。

### 【「マッチングゲーム」のやり取り】

教師: Please think about spring.

児童: Ok.

教師: In spring, we have...hanami.

児童は教師と同時に発話し、季節に合った英単語を1つ選んで発話する。⇒教師と同じ単語を選んだら1ポイント

### 【「日本人ガイドになろうゲーム」のやり取り】

児童A: Hello.

児童B: Hello.

児童A: What event do you have in winter?

児童B: In winter, we have a snow festival.

児童A: Thank you. ⇒会話の役割を入れ替える

図2 児童-教師間のやり取り【マッチングゲーム】

図3 児童-児童間のやり取り【日本人ガイドになろうゲーム】

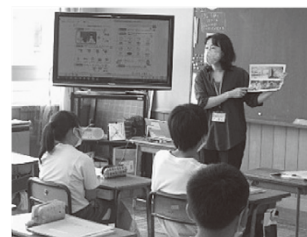


図4 JTLのスモールトーク

Unit 6では、前単元で日本やふるさとの行事に目を向けた経験を活かし、「長岡市の魅力ある施設や場所を紹介しよう。」と提示した。前述のように留学生に紹介するという目的があったので、英単語や表現を学ぶ意欲は高く、教師やJTLの発話を聞き、復唱する声が大きくなったり、積極的にゲームに参加したりする姿が見られた。本単元でも、スモールステップで英単語の反復練習をし、カード交換ゲームを行って児童間での発話機会を増やしていった。発話練習の積み重ねにより音声と文字での英単語の意味の識別ができるようになった児童は、教師とJTLのスモールトーク(図4)やリスニング教材でキーワードや表現を聞き取ることができるようになった。そして、見聞きすることに慣れた段階で、「読む」と「書く」の活動を行った。「読む」では、テキストの「Let's listen and read.」を4回の段階を踏んで指導した。1回目は「読まれた英文部分の色が変わるのを見ながら聞く」、2回目は「音声を聞きながら、どこが読まれているのか指でなぞる」、3回目は「JTLの後に続いて、英文を細かく切って読む」、4回目は「センテンスごとにJTLの後に続いて読む。」とした。慣れ親しんだ表現を段階的に聞くから読むにつなげたことで、児童はスムーズに英文を声に出して読むことができた。英語で表記された文を言葉のまとまりとして読み、内容を理解している様子が見られた。その後、自分が書き表したい内容を英語で表現する「書く」活動に移行した。

## (3) 既習表現の想起・活用を促す板書とワークシート

Unit 2の終末には、4人の班を作り、1人が1つの季節を担当した。「In 季節, we have行事名. You can動詞+目的語.」の表現形式に、自分が調べた行事について紹介したい内容を当てはめて書く活動を行った。ここでは、既習の動詞を板書で示し、児童のこれまでの知識を想起した(図5)。ワークシートは、1枚を季節ごとに4分割し、班の4人で分担する形式にした。それぞれで紹介文を作成し、発表後に1つにまとめて学級内に掲示した。

児童は、自分が担当した季節にある行事について伝えることを考え、内容に合う英語表現や英単語を見付け、それらを組み合わせることで文章化し、書き表すことができた(図6)。

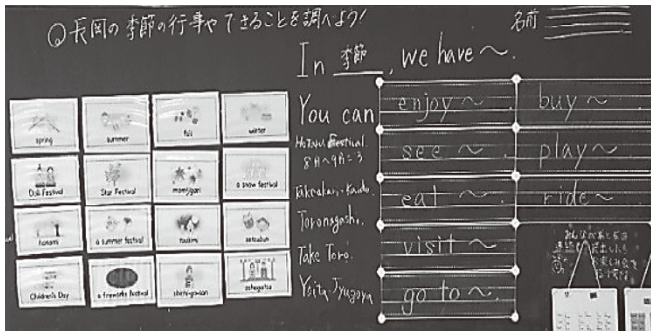


図5 既習の単語・動詞を想起する板書

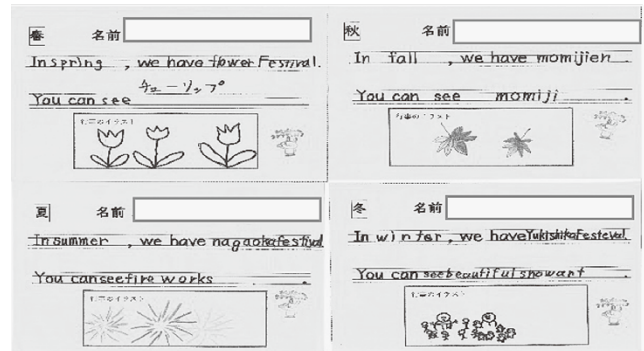


図6 グループで作成したワークシート

Unit 6では、基本的な表現をなぞり書きし、自分が表現したい内容に合わせて動詞や目的語を考え、英文を書く部分と、自分が紹介したい施設や場所についての紹介をより詳しく伝えるために自由に表現できる部分からなる2種類の四線を用意した(図7)。さらに、既習の表現を黒板に提示した。これにより、自分が伝えたい施設や場所の魅力を書き表すだけでなく、季節によってできることや自分自身のことや自分の経験を英文に表したいという児童の姿が増えていった。そのため、教師やJTLに「～と書きたいのだけれど、どうやって書けばいいのか。」「～は英語で何と言うのか教えてほしい。」と進んで質問し、個性あふれる英語表現に至った。

長岡の魅力を紹介するポスターに掲載する画像をインターネットで探し、ポスターを印刷した後、自分で英文を書いてポスターを制作した。児童にポスターのデザインも楽しんでほしいと考え、自由な割付にした(図8)。

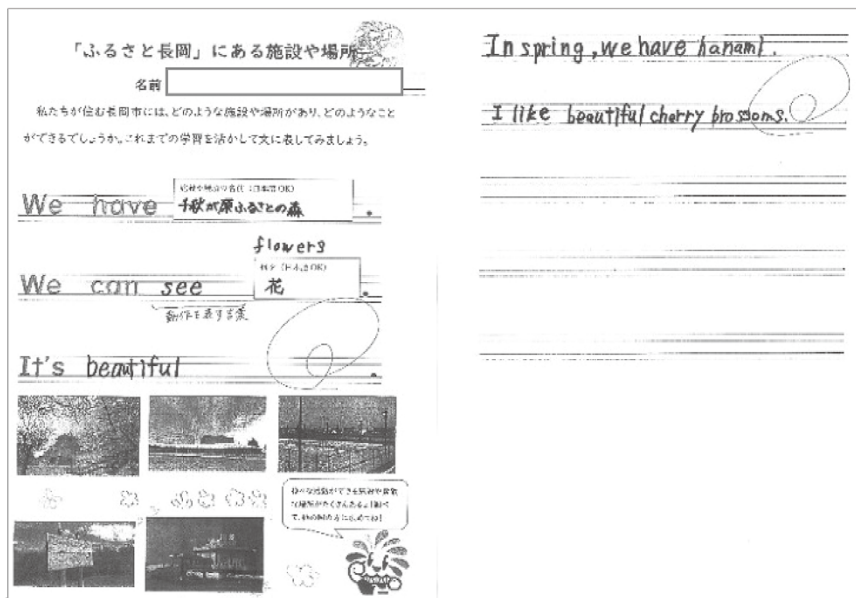


図7 児童が既習の表現を使って伝えたいことを書いたワークシート



図8 同一児童の長岡の魅力ポスター

#### (4) コミュニケーションの目的である留学生との交流会

Unit 2とUnit 6の単元を学習した終末の活動として留学生との交流会を設定した。母国が違う4人の留学生から出身国の歴史・文化・人種・宗教・行事など様々な内容を画像や映像を活用して話してもらった(図9)。その後、児童一人一人が作成した長岡の魅力紹介ポスターを留学生に自己紹介しながら発表した(図10)。

児童は2つの活動を通し、既習の基本的な英語表現の組み合わせで自分の思いを伝えられることに気づき、「自分にもできそうだ」と自信をもって発表できるようになった。また、ふるさと長岡について調べ、表現することを通して、ふるさとへの誇りをもち、外国の文化を尊重する態度で、多様性を楽しみながら聞いたり話したりする姿が見られた。留学生との交流活動は、読む・聞く・話すの3つを同時に慣れ親しませることができ、学習内容を定着させるために有効であった。また、他国の歴史や文化に興味を深めると同時に、ふるさと長岡について英語で魅力を伝えられたことに多くの児童が達成感を感じた(図11)。





図9 自国の紹介をするベトナム人のホンさん



図10 作成したポスターを発表する児童

私が知っている日本の文化とは圧倒的な違いがあり、とてもおもしろかったです。自分が学習した英語が2人の国の紹介から聞こえると、「あっ、この英語分かる!」と思い、うれしくなりました。もっといろいろな国の文化についてくわしく知りたいと思いました。(A子)

2人とも違う国だったからいろいろな情報を集めようと思っていました。それぞれいろいろな写真や動画を見て情報やどんな物があるかなどが知れてよかったです。将来、世界の世界遺産に行ってみたいなと思いました。英語が伝わってうれしかったです。そして、長岡のいろいろな食べ物などを教えられてうれしかったです。(B男)

図11 活動後の児童の感想

## 5 研究の成果と課題

児童が外国語を学ぶ必要性を感じる「ふるさとの魅力を他国の出身の人に伝える」というコミュニケーションの目的を設定することにより、長岡の行事や施設、魅力ある場所の言い方や英語表現を学ぶ目的が明確になった。児童が発話練習を繰り返したり、ふるさと長岡の魅力を意欲的に調べ、伝えたいことを表現しようとする姿は、コミュニケーションの目的が明確で、相手意識が醸成された成果である。「ふるさとの魅力をより分かりやすく留学生に伝えるためには、どうしたらもっと豊かな表現になるか。」と探求心を高めた児童は、進んで伝えたい内容を既習の英語表現と組み合わせ表現したり質問をして新しい言葉を習得したりした。

また、単元の入替えにより、児童が書き表したワークシートから既習事項を繰り返し活用した様子が見られた。大単元を通して学んできた「We have」を使った行事や場所、「We can」を使っただけでなく、「It's」を使った感想、「In」を使った季節によってできること、「I like」を使った好きなことなどを組み合わせ、自分が伝えたいことを懸命に考えた形跡が残っていた。既習表現を活用しやすいように単元を入替えたことによって児童がその表現を使う頻度が増えたり、既習表現を想起する板書を提示したりすることで児童の知識として英語の表現が蓄積されたと言える。さらに既習の英語表現への慣れ親しみの度合いが深まり、「これまでに学んだことのない表現を知りたい、書いてみたい」という発展的な意欲が高まり、教師やJTLに積極的に質問をする児童の姿につながった。学習内容の習得状況を分析すると、基本となる文章で3文を書いた児童が9名、4文が7名、5文が6名、6文が4名、7文が3名、8文が1名であった。この数値から30名中21名が基本となる3文を上回って記述したことが分かる。その英語表現の選択や組み合わせは様々だが、長岡の魅力紹介ポスターは児童が伝えたいことを表現しようとした証拠と言える。これらの学習活動につながり、「聞く」「書く」「読む」の学習過程を経て、児童は何度も英語の表現に触れたことで、自分の思いをスムーズに英語で「話す」ことができた。留学生に向けた発表では、留学生は児童の発表を聞き、児童が自分の思いを英語で伝えようとする姿に感激していた。留学生が一人一人の発表に賞賛や質問をしたことで、児童は自分が英語で話した内容が伝わったことに喜びを強くした。学んだことが自分の思いを伝える手段となり、学習の成果や自己の成長を味わうことができる大単元となった。

本実践では、他国出身の方々に学習してきた英語で自分の思いを伝える場面を設定し、ふるさとの魅力を伝えようというコミュニケーションの目的を明確に設定したことで、児童が目的意識をもって意欲的に学習に取り組み、既習の英語表現を活用してコミュニケーションを図ろうとする態度が見られた。

これからの外国語科の単元開発の課題は、教師が児童に外国語を学ぶ意義を感じさせられる単元をいかに開発し、学びの連続性をもたせるかであると感じる。教師は、新学習指導要領で示された4技能5領域の目標や学びの過程を理解し、的確な児童の実態把握と人的環境の充実などを工夫した単元開発と言語活動の設定をすることが必要である。連続性のある単元を開発し、児童の技能をいかに高めるか考え、実践に努めなければならない。本実践は単元開発に着目したが、今後児童の技能を適切に評価する評価基準や方法について研究が必要である。

## 【引用文献】

- 直山木綿子「移行期間中における外国語活動の授業づくりのポイント」『初等教育資料』東洋館出版社、2018年12月号
- 中岡正年「外国語活動における必然性のあるコミュニケーションを伴う単元構成：意図的インプットと明確なアウトプットの場の設定による児童への影響」『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』43号、2020年、112～115 pp
- 文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」、2017年
- 文部科学省「小学校学習指導要領」(平成29年告示)、2018年